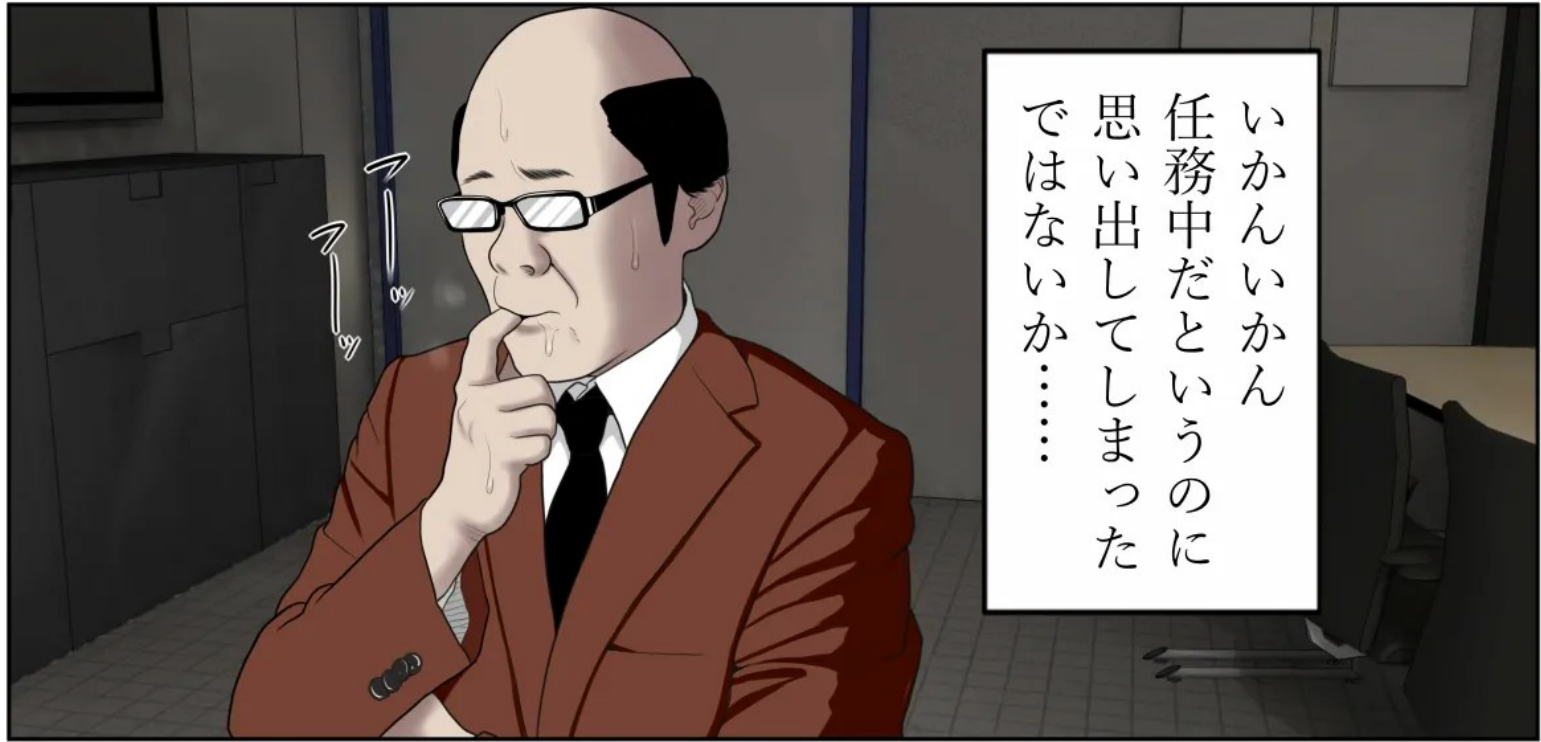


● REC

人妻スパイとマフィアの真実 3













この調子じゃ
今夜も徹夜だな
いい加減にして
くれないか？

も、申し訳ございません



彼女の帰りが遅くなる場合ー



アイツにはいつも特訓しているが…

よしっもういっちょやるかっ



あ…あの…外しましたよ…



従順な部下は疑う事を知らない



おっおっしやる
通りです…

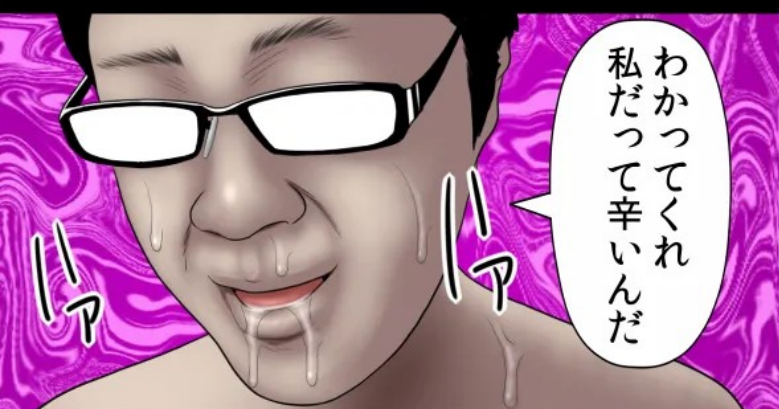
いくらお前が
強いからといって
敵に捕まらないとは
限らない……

ぬっち…

ぬっち…

ぬっち…

ぬっち…



ハァ

ハァ

わかってくれ
私だって辛いんだ



逃げられない場合は
直ちに作戦を変更し
相手を虜にするよう
努めるんだ

ハイ…

モニニツ

モニツ

お前のこの身体は
いざという時
武器になるのだ

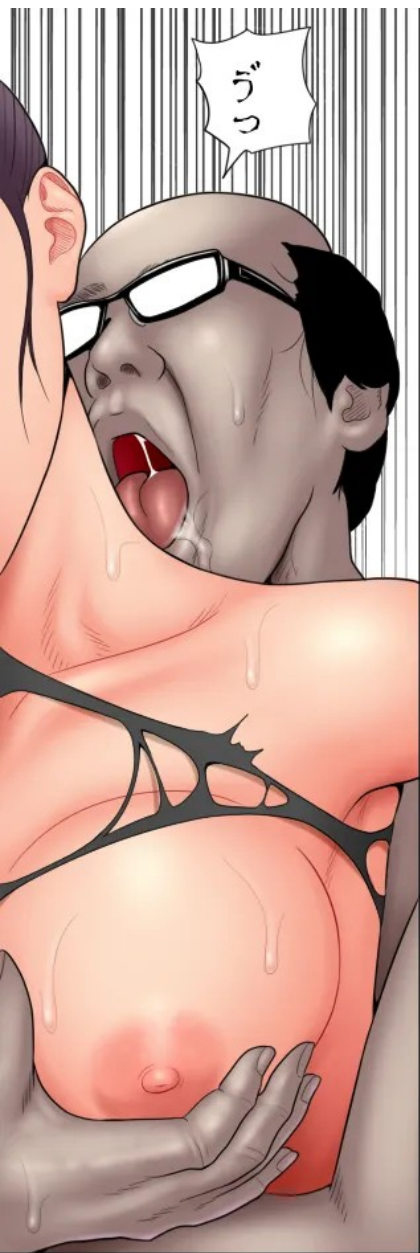


ツッ

ツッ

ツッ

ツッ



うっ



本当はこんな事
したくはないんだ
わかるだろ？

ハイ…ボス

いっ
いっ
いっ

いっ
いっ
いっ



組織のために
共にならぼう

ハッ

ハッ

ハッ



んんん

んんん

んんん



私は所かまわず
「特訓」と称し
彼女を犯した

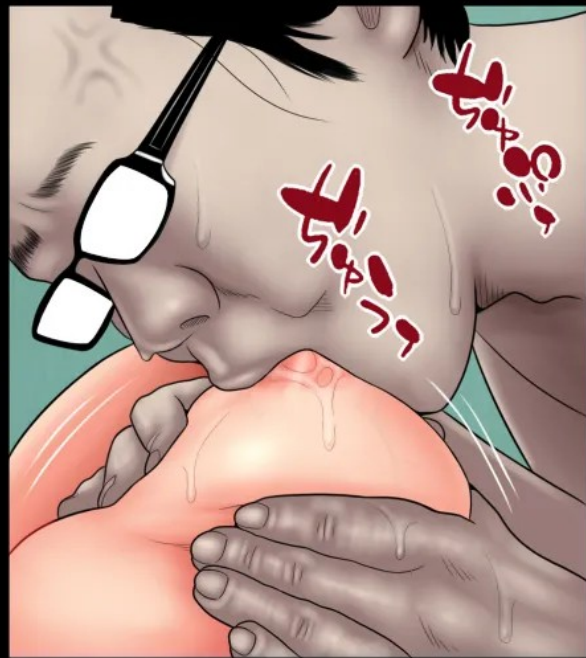
組織の長という
優位的地位を
利用したのだ



ボスへの
服従は絶対だ
命令とあれば
逆らうことは
許されない

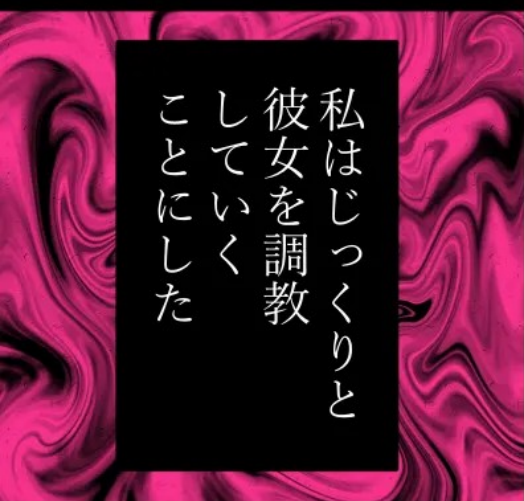







私はジャックに
激しい嫉妬を覚えた









命令とはいえ
初めのうちは
本当に
嫌がられた

私は無理矢理
彼女を拘束し
これは訓練
なのだ
と
説き伏せた




とにもかくにも
合法的にする
レ○プがこんなにも
気持ちいものだと
は
思わなかった：

いまだに
これ以上の
快樂には
出会ってない



彼女が私の事を
生理的に嫌って
いるのは前から
わかっていた



しかし、その事が
かえって私を
興奮させるのだ

嫉妬に
狂いながらも
毎日のように
彼女を犯した

たまらなかった：

なすすべもなく
悔しそうにしてる
表情を見ると
何度射精しても
勃起が治まらないのだ



そして
信じがたい
ことが起きた：



元々Mっ気が
あったのか
次第に嬌声を
上げるように
なったのだ





あ...あ...あ...
あ...あ...あ...
あ...あ...あ...

ビクッ
ビクッ



イ...イキそう
です...

あ

ホ...ホス...



ハア

ハア



んぽっ

んっ

んぽっ

んぽっ

んぽっ

「特訓」を始めて
三ヶ月くらいだろ
うか
ついに彼女を絶頂
させる
ことに成功した

感じたことのない
優越感と達成感が
私の心を満たした



更に一年が
経過した

何でも言う事を
聞くようになった



ハア
ハア

ハア
ハア

ブルッ
ブルッ

ブルッ
ブルッ

ハア
ハア

ハア
ハア

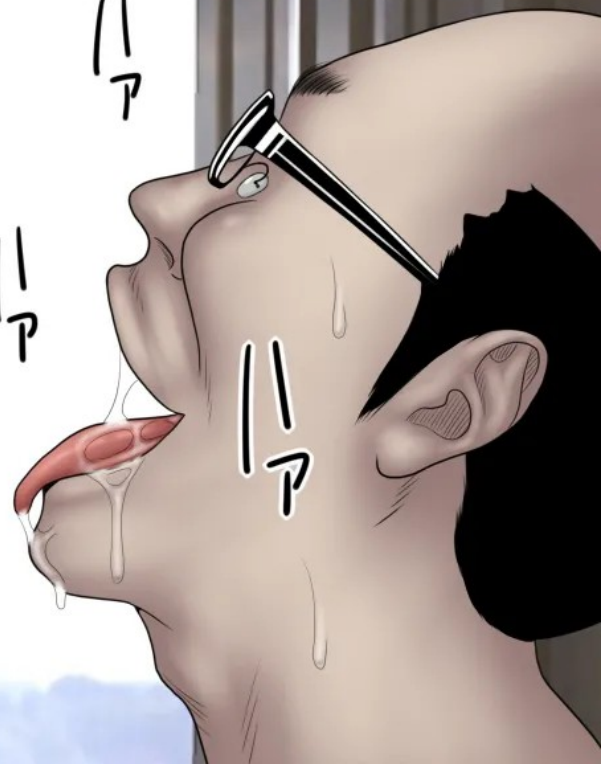
私にとって
最高の女スパイが
完成したのだ



ハア
ハア

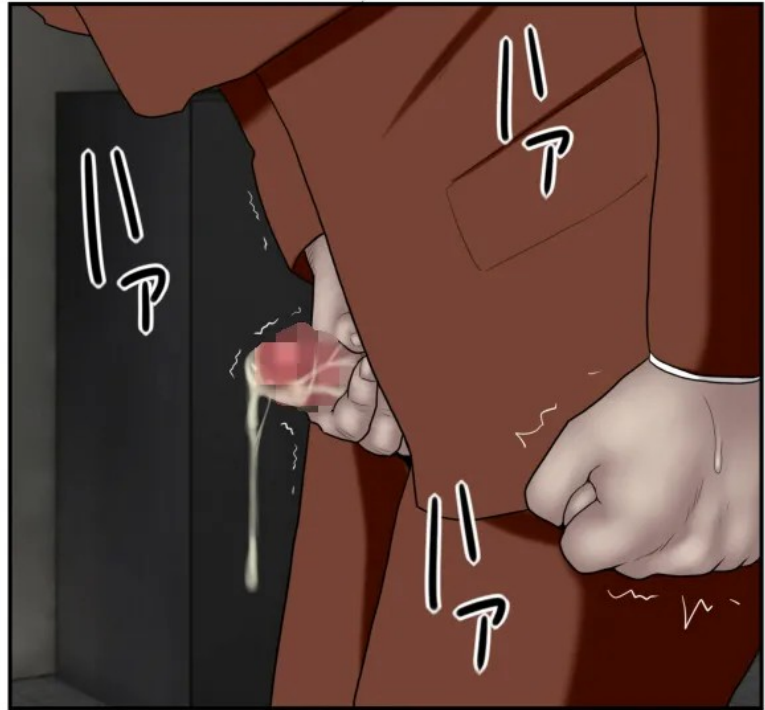
ハア
ハア

ハア
ハア

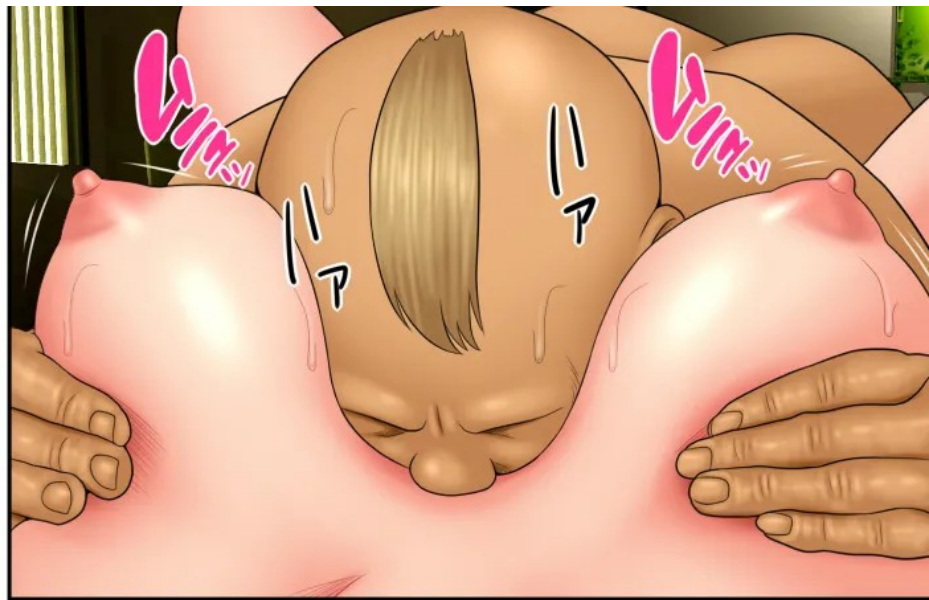
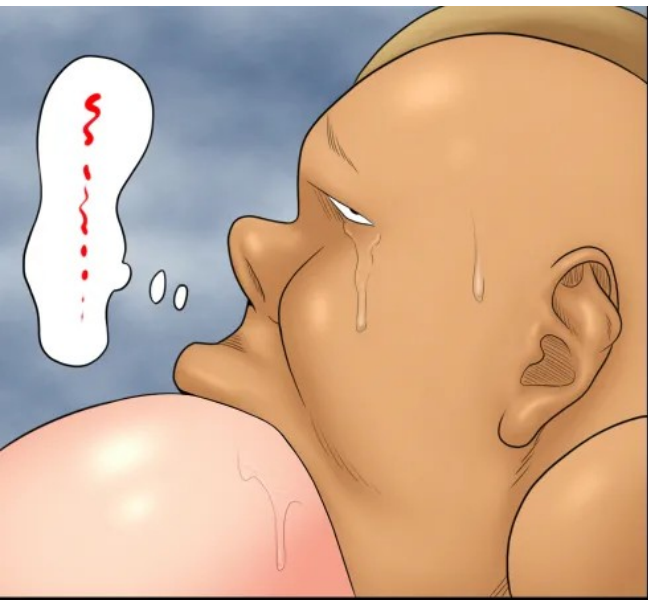






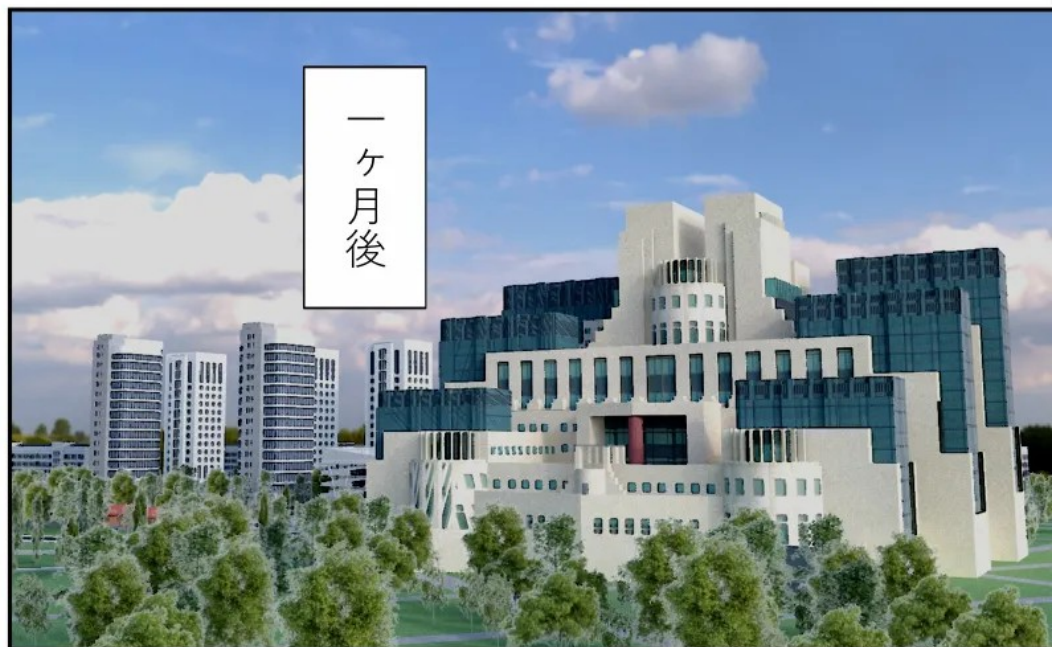






パパはどんな女でも
堕としてきたんだ














お前が寝取られる姿
一度でいいから
見てみたかったんだ

また単独で
潜入^{もぐ}って
くれるか？

勿論ですボス
何なりと
お申し付け
ください